

昭和62年度ヒラメの標識放流について

小島 博・城 泰彦・上田 幸男
高木 俊祐*・斎浦 耕二*

徳島県栽培漁業センターでは昭和59年度よりヒラメの種苗生産事業を開始し、沿岸の漁業協同組合へ30mmサイズの種苗を配布している。配布種苗は各組合で2週間程度の中間育成の後、主に40~50mmにしてそれぞれの地先へ放流されている。放流後、白化個体の漁獲やこれまでヒラメの少なかった水域での漁獲等によりヒラメ種苗は放流効果があるものと期待されている。

しかし、本県における放流後のヒラメの分散、移動、成長など栽培漁業を効果的に行う上での資料がなく、栽培技術の問題点について未整理のまま残されているのが現状である。そこで、本年度は阿南市橘町、大湊、中林の各漁協、牟岐町の各漁協及び海部町柄浦漁協の協力を得て、アンカータグの装着が可能な10cmサイズまで中間育成を行い、各地先へ放流した。特に、橘湾での放流は小型底引網漁場への添加を図る目的で橘湾

口部への放流を試みた。

1. 方法

昭和62年4月中旬に徳島県栽培漁業センターより配布したヒラメ種苗のうち阿南市橘町漁協、牟岐西漁協及び柄浦漁協の3組合が中心となり、アンカータグ標識装着可能な大きさまで中間育成をし、標識を付けて放流した。これらの3組合の標識放流データを表1にまとめて示した。また、放流場所は図1に示したとおりである。橘放流群は裸島の北西水域で、周囲に低い岩のある水深約15mの砂地に放流した。牟岐放流群は港内の中間育成場所、柄放流群は港と外洋を結ぶ水路にある中間育成場所にそれぞれ放流した。

2. 結果

表1 標識ヒラメの放流数と平均全長

場所	放流年月日	放流数	平均全長	標識の種類
阿南市橘	62年6月6日	700尾	11cm	アンカータグ 白色
牟岐町	62年6月10日	1,800	11	アンカータグ 橙色
海部町	62年5月29日	3,527	9	アンカータグ 赤色

1) 橘放流群の再捕位置

橘放流群の昭和62年6月から8月の間の再捕位置を図2、また9月から翌年1月の間の再捕位置を図3に示した。最初の再捕報告は放流7日目に放流地点に近い飛島での刺網によるものであった。その後、湾奥部の長島、香で再捕された。7月には小勝島周辺やアコメから中林にかけて再捕された。8月には小杭、高島、手斧ばえを結ぶ線から湾奥側で多くの放流ヒラメが再捕された。また、舞子島と伊島の間、裸島沖の底引き網漁場からも再捕された。9月には小勝島と高島で再捕され、舞子島と伊島の間、底引き網漁場からも再捕された。10月には高島、弁天、日本電工前などで再捕された。11月になると香、小杭、フリコウシなど再捕場所は狭い範囲に限られた。12月から、1月上旬にかけての再捕場所は11月と類似し、橘湾南側の狭い範囲



図1 標識ヒラメの放流場所

*徳島県水産課改良普及係

に限られた。12月から1月上旬にかけての再捕場所は

11月と類似し、橘湾南側の狭い範囲に限られた。

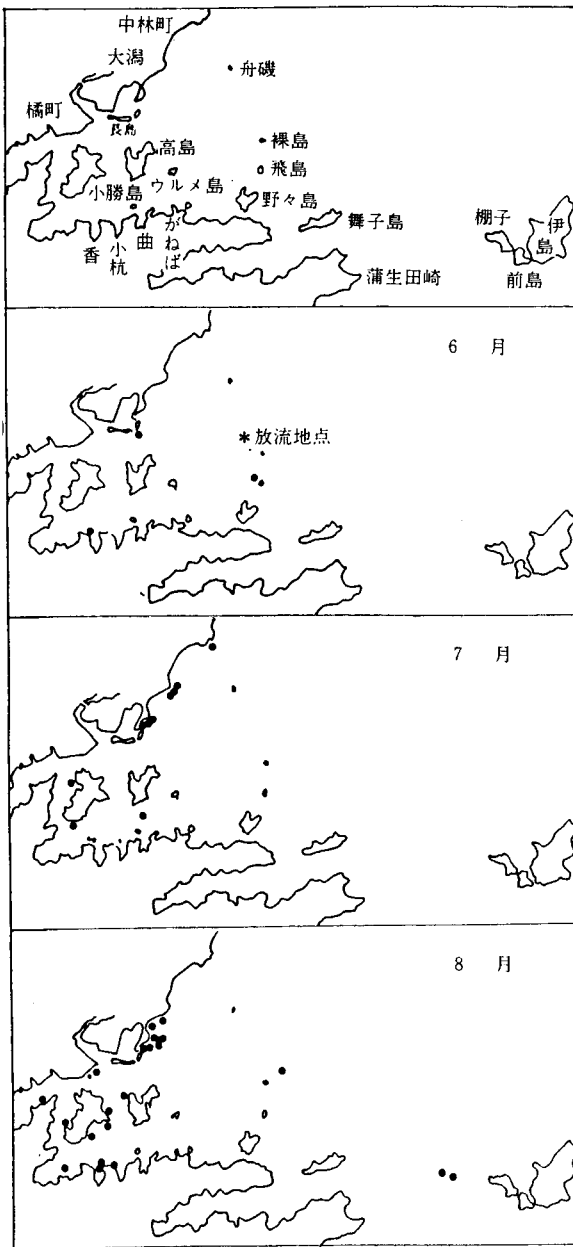


図2 橘湾標識放流ヒラメの再捕場所(6~8月)
黒丸は再捕位置を示す。

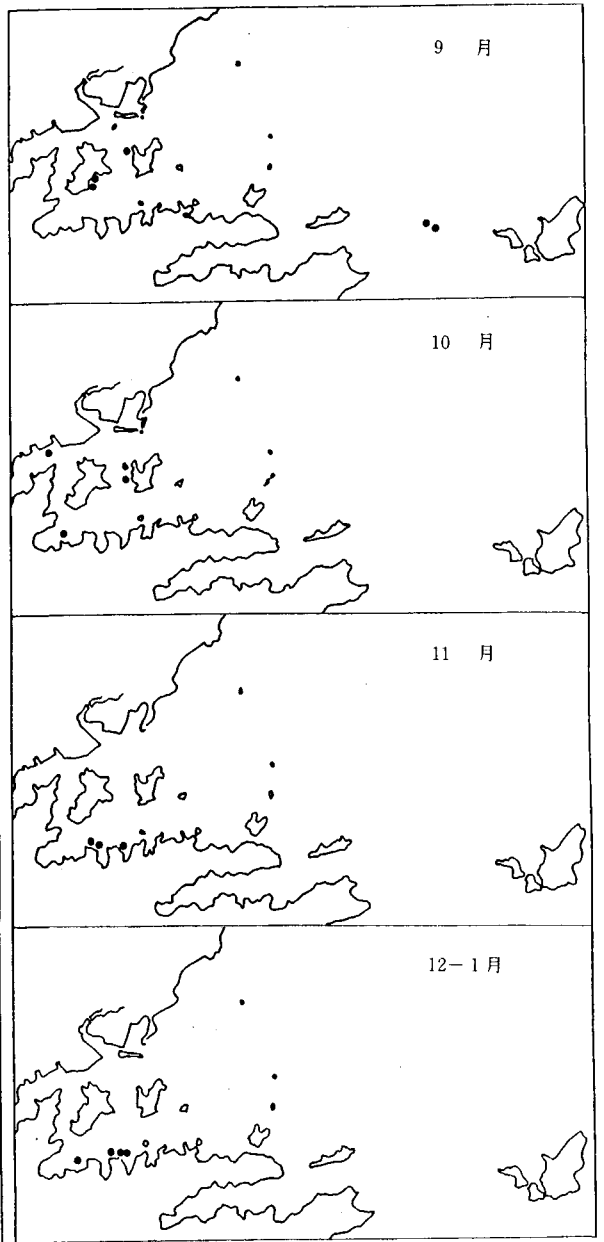


図3 橘湾標識放流ヒラメの再捕場所(9~11月)
黒丸は再捕位置を示す。

2) 橋放流群の漁法別による再捕個体数

再捕されたヒラメの漁法別による月別個体数を表2に示した。この表に示した個体数には再捕報告はあつ

表2 橋湾における放流ヒラメの漁法別による月別再捕尾数

年月	刺網	小型底びき網	小型定置網	合計
63・6	2		1	3
7	8	1	1	10
8	20	3		23
9	6	2	1	9
10	8			8
11	5			5
12	4			4
64・1	5			5
合計	58	6	3	67

たが、漁獲直後に現場で再放流した16個体も含めた。漁法別にみると刺網による再捕が最も多く、全体の87%に達した。次いで、小型底びき網の9%、小型定置網4%の順であった。7月に小型底びき網で再捕したものは小勝島と曲の間で実施した試験操業によるものである。報告個体数は7月から10月に多く、特に8月に集中した。報告数は67個体で、放流個体数700個体に対して報告率は9.6%であった。

3) 放流ヒラメの成長

放流ヒラメの再捕時の全長を図4に示した。橋湾においては、6月上旬に全長10.5cmで放流したヒラメは、最後の報告を得た1月上旬まで、ほぼ直線的に成長し、1月上旬には約25cm前後になることが窺われる。しかし、成長の個体差は大きく、8月下旬にすでに22cmに成長した個体もあるが、10月下旬にまだ全長14cmにし

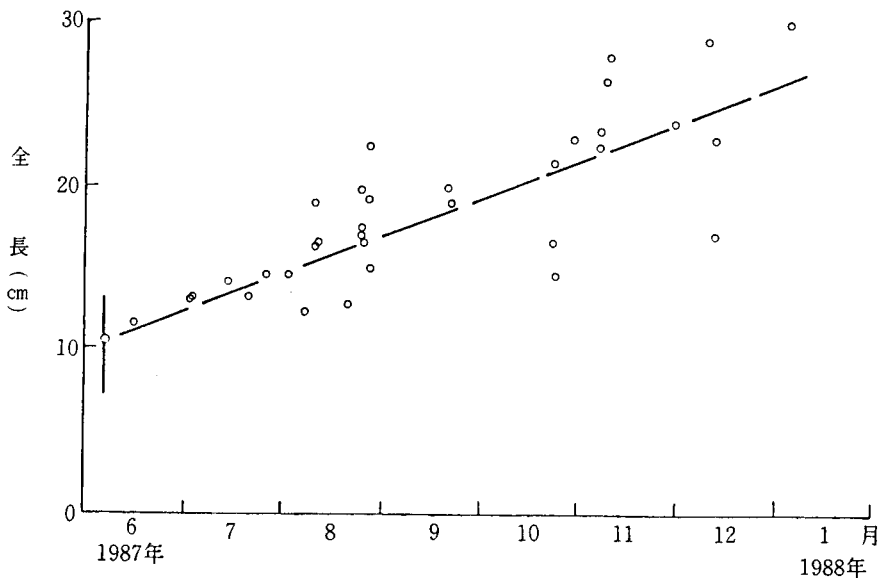


図4 阿南市橋湾裸島沖標識ヒラメ放流群の成長
垂線は放流時の全長範囲

3. 考 察

海部郡沿岸でのヒラメの漁獲は主に冬春期のヒラメ刺網による。放流した当才ヒラメの報告が無かったことは、夏から秋にかけて再捕する漁法が無いことによるとと思われる。放流した当才ヒラメの分布、回避は明らかにできなかったが、これまでに放流した白化個体が漁獲されていることから、今後、標識放流群の再捕報告のあることが予想される。一方、橘湾では、従来湾奥部で中間育成、放流を実施してきたが、放流後湾奥部の刺網で多く獲れ、湾外の小型底びき網漁場まで殆ど移動しないと考えられていた。そこで、放流場所を底びき網漁場に近い湾口部を選定し、底びき網漁場への添加を期待した。8月から9月の間に放流魚の一部が底びき網漁場で再捕されたが、多くは放流直後か

ら湾奥方向へ移動したと判断した。今回の放流実験により、橘湾の湾奥部は広範囲にわたって夏の生育場として利用されること、また橘湾の南側水域が秋から冬にかけての生活の場として利用されることが分かった。更に、橘湾の南側水域は放流した当才ヒラメの越冬の場となっている可能性もあり、周年にわたる生活の場としての好条件を備えた水域として注目される。今後、橘湾南側水域において放流ヒラメの生態や環境を調査することによりヒラメの栽培漁業に多くの示唆が得られるものと思われる。

本報告を終わるにあたり、調査に御協力戴いた橘町、大潟、中林、牟岐西、牟岐東、牟岐中央、牟岐手羽、鞆浦の各漁業協同組合の関係者の方々に深く感謝します。